


先週私たちは、アナニヤとサツピラによる偽りと彼らの死について見ました。サタンに心奪われた彼らは、救いの証印として自分たちに与えられた聖霊と、その聖霊を遣わされた神様を欺いたのです。そのような彼らに対する主の対応は、彼らのいのちをその場で取られるというものでした。実に恐ろしいことですが、それを通して教会全体とそれを聞いたすべての人のうちに非常な恐れが生じるのです。では、その後教会は、どうなっていたのでしょうか？今日はその続きを見ます。

12-16 節「また、使徒たちの手によって、多くのしるしと不思議なわざが人々の間で行われた。みなは一つ心になってソロモンの廊にいた。13 ほかの人々は、ひとりもこの交わりに加わろうとしなかったが、その人々は彼らを尊敬していた。14 そればかりか、主を信じる者は男も女もますますふえていった。15 ついに、人々は病人を大通りへ運び出し、寝台や寝床の上に寝かせ、ペテロが通りかかるときには、せめてその影でも、だれかにかかるようにするほどになった。16 また、エルサレムの付近の町々から、大ぜいの人が、病人や、汚れた霊に苦しめられている人などを連れて集まって来たが、その全部がいやされた」。

「生まれつき足のなえた人」にもたらされた癒しと、そこから始まったみことばの宣教は、さらに広がり続けます。この時、みな一つ心になって集まっていた「ソロモンの廊」とは、神殿の東側に建てられた大理石のコリント式円柱のあるところです。 前の絵を見て下さい。みなは一つ心になって、このところにいたわけですが、そこでは使徒たちの手によって多くのしるしと不思議なわざが行われていたといえます。

ここであることに気づかれた方もおられると思います。というのは、13 節では「ひとりもこの交わりに加わろうとしなかった」とあり、次の 14 節では「主を信じる者は男も女もますますふえていった」とあるからです。実のところはわかりませんが、この「交わりに加わろうとしなかった人々」とは、おそらくすでにみことばを聞いたことのある人々のこと、そして「主を信じた人々」とは彼らとは違い、新しくみことばを聞いて、主を信じた人々のことではないかと思えます。15 節の病人たちを大通りへ運び出し、寝台や寝床の上に彼らを寝かせた人々とは、この主を信じた人たちであったようです。

驚くべきことは、この時、エルサレムで起こっていたこれらの出来事を聞いた人々が、その付近の町々からも大ぜい来るようになり、彼らが連れてきた病人や汚れた霊に苦しめられている人たちが、みないやされたということです。「いやされる人もいたら、いやされない人もいた」ではなく、その全部がいやされました。まさに、そこでは不思議としるしが行われていたのです。では、そこでは、みことばは語られなかったのでしょうか？「主を信じる者がますます増えていった」ということからして、当然、みことばが語られていたことが考えられます。みことばが語れることなしに、誰も主イエスを救い主と信じることはできないからです。

ここで起こっていること、それは主が昇天前に、弟子たちに語られたこと、約束されたことといえます。使徒 1:8「しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります」。この「エルサレム、ユダヤ」の部分、まさにこのところで実現へと向かっていたのです。

ですから、聖霊を受けた弟子たちが、まずエルサレムにおいて、しかも、その中心である宮で、みことばを語っていたことは、極めて当然のことと言えるでしょう。そこには多くの人々がいましたが、なによりもペテロたちが語った「死者の復活」の教えに反対する者たち、つまり、彼らを捕らえたユダヤの指導者たちがいました。彼らは福音とは関係のない人ですか？いいえ。彼らも主に救われる必要のある罪人でした。ただ彼らは、先の「生まれつき足のなえた人」へのいやしの際に、ペテロたちが語ったキリストの証を受け入れませんでした。それどころか、「主の名によって誰にも語ったり、教えてはいけない」と厳しく戒め、また脅しを加えた上でペテロたちを釈放したのです。

その脅しにも関わらず、ペテロたちはみことばを大胆に語り、主の名によって不思議としるしのわざを宮で行ったわけですから、当然、17-18 節のことが続くわけです。「そこで、大祭司とその仲間たち全部、すなわちサドカイ派の者はみな、ねたみに燃えて立ち上がり、18 使徒たちを捕らえ、留置場に入れた」。

そのままの流れで行くなら、その後、議会が開かれ、ペテロたちは、その中に立たされるはずでした。ところが、そこでも不思議なことが起こるのです。19-20 節「ところが、夜、主の使いが牢の戸を開き、彼らを連れ出し、20 『行って宮の中に立ち、人々にこのいのちのことばを、ことごとく語りなさい』と言った」。

御使いに命じられた通り、ペテロたちは、夜明けごろ宮に入り、再びみことばを教え始めます。この時、そこにはどのくらいの人が入り、みことばを聞いて、どれだけの人が信じたかなど、その詳細は記されていません。でも、おそらく短時間であったと思います。というのも、使徒たちが宮で教えているのが、指導者たちの耳に入り、彼らは再び捕らえられてしまうからです。その様子をもう一度、聖書から見ます。

21-26 節「彼らはこれを聞くと、夜明けごろ宮に入って教え始めた。一方、大祭司とその仲間たちは集まって来て、議会とイスラエル人のすべての長老を召集し、使徒たちを引き出して来させるために、人を獄舎にやった。22 ところが役人たちが行ってみると、牢の中には彼らがいなかったのので、引き返してこう報告した。23『獄舎は完全にしまっており、番人たちが戸口に立っていましたが、あけてみると、中にはだれもおりませんでした。』24 宮の守衛長や祭司長たちは、このことばを聞いて、いったいこれはどうなっていくのかと、使徒たちのことで当惑した。25 そこへ、ある人がやって来て、『大変です。あなたがたが牢に入れた人たちが、宮の中に立って、人々を教えています』と告げた。26 そこで、宮の守衛長は役人たちといっしょに出て行き、使徒たちを連れて来た。しかし、手荒なことはしなかった。人々に石で打ち殺されるのを恐れたからである」。

なぜ御使いは、この時、使徒たちを牢から出したのでしょうか？いのちのみことばを語らせるためという理由は理解できます。でも、彼らは、その後すぐにまた捕らえられてしまうのです。そうであるならば、その短時間の解放と、その間にみことばが語られることに、どこまでの意味があったのでしょうか？主の使いは、彼らが再び捕らえられることを知らずに、誤って彼らを解放してしまったのでしょうか？

残念ながら、私はその答えを持っていません。使徒たちをして、彼らがみことばを教えたということは、そこに人々がいたからですが、仮にその数がわずかであったとしても、みことばは彼らに教えられる必要があった、ということでしょう。そのために主は、み使いを通して使徒たちを自由にされた、といっても間違いではないと思います。でも、私が同時に思わされたこと、それは奇蹟や主の使い、死者の復活を信じないこの指導者たちのためでもあったと思うのです。

それは必ずしも彼らをして、その場で主を信じるためではなかったかもしれません。事実、彼らは主を信じるどころか、この後のペテロたちの証言によって怒る狂るのです。その様子は、次回の箇所になりますが、33 節に記されています。「彼らはこれを聞いて怒り狂い、使徒たちを殺そうと計った」。この指導者たちの応答は、みことばを聞いて心刺され、悔い改めとバプテスマをもって主を信じた人々とは全く違います。

では、彼らをそこまで怒らせた使徒たちは、いったい何を語ったのでしょうか？ペテロたちが、彼らに返事をするきっかけとなった大祭司の言葉から見ます。28 節「あの名によって教えるはならないときびしく命じておいたのに、何ということだ。エルサレム中にあなたがたの教えを広めてしまい、そのうえ、あの人の血の責任をわれわれに負わせようとしているではないか」。これに対してペテロと使徒たちが答えるのです。

29-32 節「人に従うより、神に従うべきです。30 私たちの父祖たちの神は、あなたがたが十字架にかけて殺したイエスを、よみがえらせたのです。31 そして神は、イスラエルに悔い改めと罪の赦しを与えるために、このイエスを君とし、救い主として、ご自分の右に上げられました。32 私たちはそのことの証人です。神がご自分に従う者たちにお与えになった聖霊もそのことの証人です」。

このことばを聞いた指導者たちは怒り狂い、使徒たちを殺そうと計るわけですが、ペテロたちのことばは、最初、捕らえられた時に語ったものと基本的には同じです。では、その時とこの時では、何が違ったのか？それは大祭司のことばからもわかるように、使徒たちが自分たちの権威を無視し、いやそれに逆らって、主イエスの教えをしたことに対する怒りがその一つといえるでしょう。また、使徒たちを通して行われた不思議としるしによって、人々が使徒たちのうちに神の力を見、彼らの教えに引き寄せられることに対するねたみが、彼らのうちでいよいよ大きくなったことがあげられるでしょう。

怒りやねたみは、神様の御心を実現するものではありません。むしろ、それは神様に従うことを妨げるものです。怒りやねたみを通して、私たちの本心は明らかにされます。自分が何に価値を置き、何を信じて生きているのかがわかるのです。ユダヤの指導者たちは、確かにみことばを聞きました。彼らは一度ならず、二度までも、直接使徒たちから主イエスが救い主であることを聞いたのです。でも、彼らはそれを受け入れることができませんでした。なぜですか？神ではなく、自分のことしか考えていなかったからです。外側は、神様を敬い、その教えに従っているようでも、内側は全くそうではありませんでした。

でも、ペテロたちは違います。彼らは主イエスを信じていました。主によって罪赦され、永遠のいのちが与えられることを信じていたのです。それゆえに、主を信じるのが、心だけでなく、その生き方を通して主に従うことであることを心得ていました。ですから、指導者たちに逆らい、宮でみことばを教えることをしたら、どうなるかわかりながらも、彼らは主に従うことを選んだのです。従った結果は、主にお任せすることによってです。

主が、私たちに聖霊を与えて下さった理由はそこにあります。主は、私たちが主と主のみこころを知り、それに従順な者となるためにご自分の御霊を与えて下さいました。この助け主によって、私たちが最後まで主に従うことができるためです。ですから、ペテロは、その最後のところでこう言っています。「神がご自分に従う者たちにお与えになった聖霊もそのことの証人です」と。主は、その信仰を口で告白すると共に、その生き方においても、みことばに聴き従う者に、つまり、古い生き方を捨て、キリストにある新しい生き方へと向かう者に、聖霊を与え、ご自分の御心を行うことをさせて下さるのです。そして、主の御心とは、ご自分に従う者たちを通して、キリストの福音が、みことばが大胆に語られることです。

ペテロたちが一度目に釈放され、仲間たちに指導者たちの語ったことを報告した時、教会がどのような祈りをしたかを覚えておられますか？[4:29-30](#)「主よ。いま彼らの脅かしをご覧になり、あなたのしもべたちにみことばを大胆に語らせてください。30 御手を伸ばしていやしを行わせ、あなたの聖なるしもべイエスの御名によって、しるしと不思議なわざを行わせてください」。教会は、自分たちの願いとして主に祈ったことをその後も続けていたわけですが、そこに見るのは、彼らの願いと主の御心とが一致しているということです。

皆さん、みことばは、なぜ語られる必要があるのですか？なぜキリストは、信じる者たちを通して証されなければならないのでしょうか？その答えを知るには、主が十字架の道を歩まれた理由を問うべきでしょう。主イエスは、なぜ十字架に向かわれたのですか？それが想像を絶する苦しみ、全く一つである父なる神様との関係の断絶であるにも関わらず、なぜ主はその道を選び、十字架上で死なれたのでしょうか？それはご自分が私たちの罪の代価となられることで、私たちに悔い改めと罪の赦しを与えるため、罪ある私たちにさばきでなく、赦しと永遠のいのちを恵みとして与えるために、主は自ら苦しみを選んで下さいました。

あなたは、この主の愛と彼を死からよみがえられた父なる神様の御力を知っておられますか？もし知らないなら、それを主が御霊を通してわからせて下さるよう、どうぞ祈り求めて下さい。わからないのに、わかったふりをして、主を小さな方にするのはしないでください。私たちをして、主が小さく思えるのは、自分自身が大きいからです。でも、私たちはみな地のちりに等しい者です。いくら自分自身を誇ったとしても、今の時が過ぎ去れば、誰も私たちのことを覚えている人はいなくなるでしょう。でも、主なる神様は、ご自分を信じ、そのみことばと聖霊の導きに従う者を覚えていて下さいます。そして、やがての日、義の栄冠を与え、ご自分の御国に迎え入れることで、永遠をともして下さるのです。人に従うより、神に従うべきです。